【81】

氏　名（本　籍）	鳥（とり）越（ごえ）皓（ひろ）之（ゆき）（岡山県）
学位の種類	文学博士
学位記番号	博乙第 167 号
学位授与年月日	昭和58年12月31日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
審査研究科	歴史・人類学研究科
学位論文題目	トカラ列島社会の研究 —年令階梯制と土地制度—

主　査	筑波大学教授	文学博士	北見俊夫
副　査	筑波大学教授	文学博士	宮田　登
副　査	筑波大学教授	文学博士	長瀬　守
副　査	筑波大学教授	理学博士	山本正三

論文の要旨

本論文は，トカラ列島の社会を社会人類学，民俗学の立場から，主として焼畑農耕を生活基盤とする土地制度の分析を中軸にすえ，年令階梯制的社会構造の究明を目標とした論著である。すでに，1982年7月，A5判，452頁にわたる著書として御茶の水書房より刊行されている。

トカラ列島は，九州から台湾につらなる3つの群島—南西諸島（トカラ，奄美，沖縄）—の最北，つまり奄美大島と種子島，屋久島の間に点在する10の小さな島からなる。鳥越氏はこの地域に，昭和42年から10数年間にわたり実態調査をかさね，中之島，悪石島などを中心に，詳細なモノグラフをまとめ，その上に立って理論展開を試みた。

本論文の構成は，序章につづき，V部に大別し，そのなかを11の章と終章，補論および資料篇としている。大局的には，①社会学的関心から「日常生活理解」，②人類学，民俗学的視点から「日本文化起源論」，③3つの学問分野にかかわる「親族労働組織と村落類型論」を論じたものである。

第1章「焼畑の土地制度と村落構造」および第11章の「焼畑農耕技術」では，トカラ列島の島々の伝統的生産基盤である焼畑農耕の諸問題にわたって，その基礎的資料の調査，収集を企図した。そのうち，第1章の社会組織の項で，「朋類関係（ほうるいかんけい）」という新しい概念を仮説として提示することにより，この地域の基本的な社会構造を把握し，説明している。「朋類」とは，「親しくつきあえる人」の意である。トカラ社会は，既成の親族組織論によれば、双系親族制をとっているとみられるが，具体的に人びとが，なにかを契機として集まる場合，例えば丸木舟つくり（この課題は参考論文「最

後の丸木舟」1981年御茶の水書房刊に詳述されている）などの労働組織形成では双系親族＋（プラス）友人のパターンをもとに共同労働が行われている点に特色があるとしている。

第2章の「共有地と地租改正」では，地租改正によって，伝統的な共同体的土地所有制度が，あらためて「一島共有地」として法的に追認されていく過程を実態に即して明らかにした。第3章「土地制度の変遷と部落の確執」においては，地租改正終了（明治18年）後から現在までの土地制度の変遷を溯及するなかで，在来島民と移住民（奄美諸島からのもの，および戦後の開拓者）との間に展開された土地をめぐる確執を問題としている。第4章の「過疎問題と住民の対応」と第5章の「観光開発の課題と問題点」では，現在，この地域が直面している深刻な社会問題を，調査票を通して調査・分析し，問題点を論じた。

第6章の「門と一戸前」では，①トカラの社会生活と祭祀との関係を理解する前提として，②薩摩藩に固有の制度であった門割（かどわり）制度が，年令階梯制村落でどのように受容されたか，以上2つの関心から分析を試みた。その結果，年令階梯制村落では不適合と思われる門割制度が，ユーブ（要夫，15才以上60才以下の成年男子）制とよばれる労働組織をともなって，トカラ社会に適合的に受容されていることを明らかにしている。第七章「ムラの祭祀とムラの移動」では，祭祀内容から，ムラの元の場所を探る試みとして調査した結果を紹介している。そして，第8章の「日待講からみたムラの生活と社会構造」においては，伝統的宗教儀礼である日待講を通して，ムラ生活と社会構造を理解することに努めた。

第9，10，11の3つの章は，漁撈，カツオブシ製作，焼畑農耕などの生産技術と社会組織との相関性を分析し，論述している。

以上11の章に組み立てた内容は，実態調査に基づくモノグラフを主要な内容とするものであるが，その分析の上に立って，終章に「年令階梯制村落の構造論理」を配して展開されている。ここでの要点は，主として人類学者らにより，同族型村落と対極にあげられる年令階梯制村落の特質が，研究史的に整理され，それがこのトカラ列島の村落に，どのような意味で妥当するかが検討されている。結局，島越氏は，トカラ列島の村落類型を「非家的，非同族的な小世帯家族・年令階梯制」を基盤とし，年令階梯制村落の下位類型としての世代階層制村落と把握し，位置づけることができるとの結論を導き出すにいたったとしている。

審　査　の　要　旨

トカラ列島は，日本社会・日本文化の形成をめぐって重要な問題を含んでいる南西諸島の中でも，沖縄や奄美列島にくらべて，研究蓄積がきわめて少なく，俗に“謎の空間”とよばれてきたところである。この地域において果した鳥越氏の業績は，本論文にみられるように，基礎資料の収集，理論上の進展とも，学界に寄与するところが多大なるものがある。

とくに，当該地域における焼畑農耕文化の調査研究は，皆無にひとしいものであった。その空白

が一気に埋められたといっても過言ではない。高く評価される所以である。

また，鳥越氏は，トカラ列島社会を解明するにあたり，掲げた課題は幅広い関連領域にわたっている。それだけに，一方ではやや手薄になった部分がないわけではない。労働組織の特質として「朋類関係」の概念を打ち出したことは高く評価されるが，その裏付けとなる家族の構成や内部関係の事情がさらに一歩深められるならば，いっそう説得力に富むであろう。また，祭祀組織・宗教的側面は，もう少し踏み込んだ調査が望まれる。研究対象が広領域にわたりながらも，それら相互的な関連には，極力配慮が払われている。民俗などの変容を理解するために，その歴史過程，現代のトカラ社会の断面に関する叙述には，もう少し厚みをもたせることが好ましい。それらの点は，今後の課題として，鳥越氏によって充足されることを期待したい。

本論文は，総体的ぬ，トカラ社会の特質を実証的に浮彫りにした業績として高く評価されるものである。

よって，著者は文学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。